HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	若者達の香港 : その新たなイメージ
Author(s)	山村, 高淑
Citation	まほら, 28, 20-21
Issue Date	2001-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34645
Type	journal article
File Information	20010701.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

山村高淑（2001）「若者たちの香港～その新たなイメージ」
『まほら』28 号，旅の文化研究所，pp. 20-21

若者たちの香港～その新たなイメージ

山村高淑

近年、映画をはじめとする様々なメディアが、香港にこれまでとはまったく異なる新たなイメージを付与している。若者にとっての香港の旅は、こうしたメディアを通して疑似体験した仮想現実を実体験する、そんな「リアルなイベント」である。

★香港的近未来感覚

香港のもつイメージを近未来都市として見事なまでに映像化した映画に『攻殻機動隊』（押井守監督／1995 年／日本）がある。ＳＦアニメーションの傑作として内外で非常に評価の高い作品で、ご存じの『マトリックス』（ウォシャウスキー兄弟監督／1999 年／米）という映画にも、映像、ストーリーの面で強い影響を与えた作品である。この映画で監督は、2029 年という近未来を描く際、そのモデルとしての都市空間を香港に求めた。

かねてからＳＦ映画の世界では、「物理世界」から「情報世界」へとシフトした近未来を映像化することに腐心してきた。ただ単に高層化、電子化された都市を描けば近未来性を感じるかといえば、そうではない。押井監督が「ほとんど看板を描くためにエネルギーを使い果たした」とインタビュー誌で答えているように、映画では今の香港と何ひとつ変わらない看板の群が背景として描かれている。



自己増殖する看板の群（筆者撮影。2001 年 6 月）

看板という技術そのものはローテクで、決して未来を想起させるものではない。しかし、それが香港では頭上を完全に覆うほどに溢れ返り、しかも漢字という最も効率的に情報を詰め込むことが出来る媒体を用いることで、われわれに強烈な視覚刺激を与える。そしてそこにあるのは、決して欧米の都市のような完成された「静的」な美しさなどではなく、スピード感と生活臭を伴って「変化」し続ける有機的な躍動感である。

都市に氾濫する情報は朽ちていく。しかし、香港ではその朽ちる速度よりも増殖する速度の方が速く、常に新たなものが付加され、更新されていく。看板もビルも、都市計画や建築基準を無視するかのように、台風で何度吹き飛ばされようが、徹底的に経済効率のみを追求し、イリーガルに継ぎ足され増殖する。そして、この原動力となるのが人々の熱気を伴う高密な生活である。よく「混沌」という言葉で香港の街が形容されるのは、こうした有機的な生命力が都市自体にあるからだ。視覚情報だけでなく、喧騒や熱気といった五感刺激を伴うこうした香港的風景が、旅する若者に生命感のある「情報世界」としての近未来都市のイメージを与える。他の都市では決して味わえない香港的近未来感覚である。

★切なくてスタイリッシュな部会のセンス

一方、こうした香港のもつ「混沌」とした熱気を、都会的センスをもって映像化している監督が王家衛（ウォン・カーウァイ）である。彼の映像は、鮮やかな色彩と BGM を伴って、香港の若い世代の姿をわれわれに伝えてくれる。彼の作品は、日本でも特に若い世代の女性に支持され、そのロケ地を訪ねる旅行者も多い。『恋する惑星』（1994 年／香港）で描かれた「行人電動樓梯」（ヒルサイド・エスカレーター）は、その中でも最も印象的な舞台のひとつである。これは、香港島のセントラルから半山区に至る世界最長 800 メートルのエスカレーターである。映画の中では、阿菲（フェイ・ウィン）が警官 633（トニー・レオン）に一日惚れ、その彼の部屋からこのエスカレーターが目の前に見える、という設定。実際にエスカレーターの両側は密集するアパート群で、ロケをしたと思わしきアパートの部屋も手を伸ばせば届きそうな距離にある。阿菲はこのエスカレーターに乗って、彼の留守中幾度となく、こっそり彼の部屋へ忍び込む……。

都会的で無機質で乾燥した、単なるエスカレーター。そして、そこから間近に見える警官 633 の住む雑然としたアパートの窓、彼がよく食事をする士丹利街の屋台、阿菲が働く蘭桂坊のファースト・フード店、そして溢れる雑踏……こうしたいかにも有機的で湿気を伴った香港的な周囲の風景。この不思議な組み合わせの映像が、われわれに何ら違和感なく、香港の熱気、若者たちの生活感を伝える。そして、旅行者は実際にその風景の中に立つことで、映画の中で感じた熱気を再確認する。

この映画は、香港の限定された空間を舞台に、切り取ったこま切れの時間をつなぎ合わせて出来ている。そして、ファースト・フードなど無制限に大量に香港に流入する欧米の使い捨て文化を描く。そうした表現は、使用期限の付いた「切なさ」を見るものに感じさせる。そして、その「切なさ」は、植民都市、中国への返還、返還後 50 年間は資本主義を

補償するという“一国二制度”…といった香港のもつ「借りものの時間、借りものの場所」としての刹那性と重なり、われわれに香港が「切迫した今しかない街」であることを暗示する。そんな風景が、日本の若い女性に香港の若者の感覚をリアルタイムに疑似体験させる。

この映画は、これまでの香港映画の評価を一変させた。そして、香港自身にも新たなイメージを与え、今やこの界隈は日本人の若者たちにとって、ちょっと洒落たデート旅行先となっている。



『恋する惑星』のロケ地となったヒルサイド・エスカレーター（筆者撮影。2001 年 6 月）

★都市観光というデジャヴ体験

若い世代に時差はない。日本の若者も香港の若者もメディァを通して情報を共有する。香港の若者たちも、日本の映画、テレビドラマ、アニメ等を時差なく体験する。そして、そのイメージを確かめるために彼らもまた東京へ旅に出る。今、香港では『J-WALKER』なる日本情報に特化した旅行雑誌まで月刊で発売されているが、そこには観光地の情報だけでなく、最新の日本のテレビドラマの事細かな情報まで記載されている。

都市観光の特徴のひとつは、都市のもつフィクション性そのものが観光資源となる点にある。メディアの情報量が増せば、都市のもつフィクション性も増す。香港も東京も、その都市空間は若者たちのイメージによって無限に広がっていく。彼らは、遺跡観光のように特定の観光スポットを目指したりはしない。漠然とした都市の界隈を徘徊し、メディア

を通して疑似体験した感覚、その雰囲気やイメージといったものを、混沌とした都市の風景の中に重ね合せ、再確認する。時にそれはデジャヴのようでもある。そういう意味で、現代の都市観光は仮想現実に基づく極めて感覚的な観光様式なのである。

（やまむら・たかよし）